

「宇宙放射線とメディアリテラシー」

～ コロナ禍は疑似宇宙？ ～

～ 全ての事実は暫定事実 ～

21世紀に入り、国際宇宙ステーション上での宇宙長期滞在が本格化し、日本人宇宙飛行士も2020年までに7名・計9回・半年ほど滞在を果たしています。近い将来実施される見込みの月や火星への有人飛行の際には、更なる長期化が想定されますが、宇宙に長期滞在する者にとって、最後まで残る根源的な問題の1つは宇宙放射線による被曝です。

これまでに、能動型・受動型の宇宙放射線線量計を開発し、スペース・シャトルやミール・ステーション、国際宇宙ステーション内への搭載・実測を行ってきました。

3.11以降、放射線被曝にまつわる関心は高まらざるを得ない状況になりましたが、素粒子・宇宙線・原子核物理・核医学等の分野におけるサイエンスの最先端の研究において、既存の放射線測定器はそのままでは全く使い物になりません。各研究目的に合わせて独自に開発・検証する必要があり、宇宙放射線の測定についても同様です。

放射線の存在は、様々な検出媒体（物質）を通して得られる信号（放射線の痕跡）から間接的に知ることができますが、長さや重さなどの測定と異なり、目で見たり手に持ってみることで、その存在を確認できないどころか、五感から直観的に得られる情報は全くないので、膨大なウラ取り作業を必要とします。

文理连接的な要素としては、ここから転じて、我々が触れる大半の情報が、各媒体（メディア・人）を通して得た2次情報であり、その信憑性を問うには、1次情報に直接アクセスするという方法（百聞は一見にしかず）が大前提として存在しますが、そこから更に一歩進めて、時としてそれだけでは正しい情報を得られないことを、日常的な様々な題材・数字を挙げて皆様と共に考えていきたいと思っています。また、これら以外にも文理连接的な話題について言及できればと考えております。

目に見えないモノを研究対象としている分野の空気感をお伝えできればと思い、日本物理学会誌（K. Sato, vol.58, No.2, 2003）の「となりから見た超新星ニュートリノ検出の現場」を添付致します。これについては少しだけ触れさせていただく予定です。